

用言句相当慣用表現の日英対訳の型の分類とその応用

3R-1

田村 真子 亀井 真一郎
NEC 情報メディア研究所

1. はじめに

複数の特定の単語が組み合わさって全体で特別な意味を生じる表現（以下慣用表現と呼ぶ）を正しく翻訳することは機械翻訳システムにおける課題の一つである。

慣用表現には、表現全体で名詞句として振舞うもの、形容詞句として振舞うもの、動詞句として振舞うものなど様々な種類があり、また語彙的・統語的・意味的な制約も多く、従来それらに関して様々な指摘がなされている[1, 2, 3, 4]が、それらは日本語の表現としての分析にとどまっていた。しかし慣用表現を適切に翻訳するためには、対応する英語表現との関係も合わせて体系的に分析する必要がある。そこで今回、動詞句または形容詞句として振舞う用言句相当表現の日英対訳に関して、(1)対応する英語表現が日本語に対応する「動詞または形容詞」と「名詞」の組み合わせであるかどうか、(2)日本語側の名詞に連体修飾語が付き得るかどうか、(3)日本語側の連体修飾語が英語側でも連体修飾語に対応するかどうか、の3つの観点から日英対訳の型を分析し6つの対訳タイプを得た。その結果、日本語用言句相当慣用表現とそれに対応する英語表現には大別して、表現全体と表現全体との対応をとれば十分なタイプと、構成要素ごとの対応も必要なタイプの2種類があることが分かった。そして、より高品質な慣用表現の翻訳を得るために、この分類をもとにした辞書記述を検討したので報告する。

以下に分析結果の内容を述べ、辞書記述方法および翻訳への適用方法について報告する。

2. 日英対訳の型の分類

名詞、格助詞、用言からなる一般の日本語用言句とそれに対応する英語表現は、次の3つの文法属性を有する。

1. 文法属性1: 対応する英語表現は日本語に対応する「動詞または形容詞」と「名詞」の組み合わせである。
2. 文法属性2: 日本語側の名詞は形容詞や「名詞+の」などの連体修飾語を受け付ける。
3. 文法属性3: 日本語側の連体修飾語は英語側でも連体修飾語に対応する。

ところが、用言句相当慣用表現においては、必ずしも(1)の日英の語構成の対応がとれていず、また(2)と(3)の統語現象にも制約がある場合が多い。

今回、用言句相当慣用表現について上記の文法属性を調べ、表1の分類結果を得た。表1ではそれぞれの文法属性に対する属性値の組み合わせにより用言句相当表現の日英対訳のタイプをIからVIに分類してある。さらにIからIVまでをAグループ、VとVIをBグループに大きく分けた。Aグループは辞書上で日本語慣用表現全体とそれに対する英訳語との対応がとれていけばよいものであり、Bグループは慣用表現を構成している名詞と用言それぞれについても日英の対応をとるべきものである。

以下に各対訳タイプの特徴と辞書の記述方法、翻訳への適用例を述べる。

表1: 用言句相当慣用表現の日英対訳の分類図

		文法属性2	
		日本語名詞に連体修飾語がつかない	日本語名詞に連体修飾語が付き得る
文法属性1		文法属性3	
		日本語の連体修飾語が英語側でも連体修飾語となる	連体修飾語が英語側では動詞または形容詞の格要素となる
文法属性1	訳語が「動詞または形容詞+名詞」の形式ではない	タイプI Φ 袖を通す → wear	タイプIII ~電話をかける → telephone
	訳語が「動詞または形容詞+名詞」の形式である	タイプII Φ 体をこわす → injure one's health	タイプIV ~の鼻をあかす → outwit ...
		タイプV ~うそをつく → tell a ... lie	タイプVI ~の弱点をつく → touch ... on a sore spot

Φ: 連体修飾語が現れないことを示す。
「~」または「~の」: 連体修飾語を表す。
...: 「~」または「~の」に対応する英語部分を表す。

A Classification of Verbal Idioms and Its Application to Machine Translation
TAMURA Shinko, KAMEI Shin-ichiro
NEC Information Technology Research Laboratories

3. 各対訳タイプの特徴

各対訳タイプには以下のような特徴がある。

Aグループ

- タイプ I: このタイプでは、(1) 対応する英語が「動詞または形容詞」と「名詞」の組み合わせではなく、(2) 日本語の名詞にも連体修飾語がつかない。従ってこのタイプの慣用表現は辞書では表現全体で日英表現の対応がとれていなければならない。

(例) 彼女は新しい服に 袖 を通した。

→ She wore the new dress.

- タイプ II: このタイプでは、(1) 対応する英語が「動詞または形容詞」と「名詞」の組み合わせであるが、(2) 日本語の名詞には連体修飾がかからないので、訳語全体を日本語全体に対応するものとして記述して構わない。また、このタイプの慣用表現には、訳語中の名詞句が「one's」のように文脈処理により表層を決定しなければならない語を含むものがあり、その場合には辞書にそのことを記述する必要がある。例えば、「体をこわす」とその訳「injure one's health」はこのタイプに分類されるが、「彼が体をこわした」の入力に対しては「one's」を主格の人称に合わせて「He injured his health」のように訳出するようにする。なおこのような表現のうち名詞が身体の一部を表す語であるときには日本語の名詞に対して「自分の」の類の代名詞がかかることがあるがそれは訳語中の「one's」に対応する。

(例) 彼は (自分の) 体 をこわした。

→ He injured his health.

- タイプ III: このタイプでは、(1) 日本語の名詞に連体修飾語がかかることがあり、(2) その連体修飾語は英語側でも連体修飾語に対応するはずであるが、(3) 英語側が日本語名詞に対応する名詞訳語を持たないため辞書では表現全体での日英表現の対応しかとれない。従ってこのタイプの訳語は連体修飾語がかからない場合のみ訳語として使える。しかし、このタイプの慣用表現に対する英語表現には後述のタイプ V の訳語もあることが多いので以下のような場合にはタイプ V の訳語を選択して翻訳する。

(例) 電話 をかける

→ telephone(タイプ III), make a call(タイプ V)

・彼は彼女に 重要な 電話 をかけた。

→ He made an important call to her.

- タイプ IV: このタイプでは、(1) 日本語の名詞に連体修飾語がかかることがあるが、(2) その連体修飾語は英語側では連体修飾語ではなく、動詞または形

容詞の格要素となる。辞書では表現全体で日英の対応をとり、日本語の連体修飾語が英語側の動詞または形容詞の格要素となることを記述する。

(例) 彼は 上司の 鼻 をあかした。

→ He outwit his boss.

Bグループ

- タイプ V: このタイプの慣用表現は今回の3つの文法属性に関して一般用言句と同じ属性値の組み合わせを持つ。すなわち、(1) 対応する英語表現は日本語に対応する「動詞または形容詞」と「名詞」の組み合わせであり、(2) 日本語側の名詞は形容詞や「名詞+の」などの連体修飾語を受けることがあり、(3) その連体修飾語は、英語側でも連体修飾語に対応する。従って、日本語の名詞に修飾語がついた場合に、対応する英語名詞にもその連体修飾語に対応する形容詞などの英語表現を伴わせて訳出するために、辞書では構成要素の名詞と用言それぞれについて日英の対応がとれている必要がある。

(例) 彼は彼女に 罪のない うそ をついた。

→ He told a white lie to her.

- タイプ VI: このタイプでは、(1) 対応する英語表現は日本語に対応する「動詞または形容詞」と「名詞」の組み合わせであり、(2) 日本語の名詞に連体修飾語がかかることがあるが、(3) その連体修飾語は英語側の動詞または形容詞の格要素となる。従って、辞書では表現を構成する名詞と用言それぞれについて日英の対応もとり、さらに日本語側の連体修飾語は、英語側の動詞または形容詞の格要素であることを記述する。

(例) その批評は彼の 弱点 をつけている。

→ The essay touches him on a sore spot.

4. おわりに

用言句相当慣用表現を、対応する英語表現との関係から分類した。その結果、用言句相当慣用表現には大別して、表現全体の対応をとれば十分なタイプと、構成要素ごとの対応も必要なタイプの2種類があることが分かった。この分類は日英の表現の対応を考慮しているので翻訳の質の向上に直結している。今後は実際のシステムに慣用表現辞書を実装し、本分類の有効性を検証する予定である。

参考文献

- [1] 奥 雅博: 「日本語慣用表現の分析と日英翻訳への適用」, 情処研究会資料 87-NL-62-2, 1987.
- [2] 首藤 公昭 他: 「日本語の慣用的表現について」, 情処研究会資料 87-NL-66-1, 1987.
- [3] 宮地 裕: 「慣用句の意味と用法」, 明治書院, 1982.
- [4] 亀井: 「日本語の用言句相当慣用表現の分類とその応用」 情報処理学会第47回全国大会.